

中学校 音楽科 部会

部会長 方城中学校 校長 友松 秀樹
実践者 赤池中学校 教諭 高柳 麻巳

1 研究主題

「思考，判断力，表現力等を育む音楽科学習指導と評価」
～表現領域と鑑賞領域の関連を図る創作活動の支援を通して～

2 主題設定の理由

(1)社会的情勢から

学習指導要領(H20)は、確かな学力、豊かな心、健やかな体などの「生きる力」を育むという理念の元、基礎的な知識や技能を習得させると共に、知識技能を活用した思考力、判断力、表現力をはぐくみ、バランスの取れた学力の育成を目指している。特に、重要事項として言語活動の充実があげられ、各教科の指導の改善が必要となった。

その課題を踏まえ、音楽科においては、小中高を通して、「音楽の良さや楽しさを感じると共に、思いや意図をもって表現したり味わって聴いたりする力を育成すること、音楽と生活とのかかわりに関心をもって、生涯にわたり音楽文化に親しむ態度を育むことなどを重視する。」と基本方針が示された。

(2)これから先に目指す音楽教育

音楽科の目標は、「表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、音楽を愛好する心情を育てると共に、音楽に対する感性を豊かにし、音楽活動の基礎的な能力を伸ばし、音楽文化についての理解を深め、豊かな情操を養う。」である。これは、学校教育目標「生活を明るく豊かにする音楽、美術、文芸、その他の芸術において基礎的な理解と技能を養う事」をより具体的に示したものである。よって、音楽の学習内容が、現在や将来において自分の生活をより豊かなものとし、生活によりそったものにならないといけないといえる。

合唱や合奏など全員で一つの音楽をつくっていく体験を通して、表現したいイメージを伝え合ったり、協同する喜びを感じたりする指導を重視する。学習全体を通して、音楽文化の多様性を理解する力の育成を図ると共に、音楽環境への関心を高めたり、音や音楽が生活に果たす役割を考えたりするなど、音楽と生活や社会とのかかわりを実感できるように指導する。

近年、学校行事において合唱コンクールなど集団発表活動を取り入れる学校が増え、生きた表現力の向上、他との交わり、協調する中での個の力、集団の力の育成も求められるようになった。

また、作者の生き様や楽曲にかける思いなどから、道徳的な要素も多数含んでいる教材もあり、豊かな感性を身につけさせるといふ音楽の本質にも迫る支援をめざしていく。

このように、音楽科の果たす役割は、教科指導にとどまらず、学校教育において、特別活動や道徳教育にも多大な影響、効果を及ぼすと考える。

3 主題の意味

(1) 思考、判断力、表現力を育む音楽科学習指導とは

思考力、判断力、表現力を育む音楽科学習指導とは、歌唱、器楽、創作の表現活動や鑑賞の内容を思考、判断し、それを根拠をもって技能や批評文などによって具現化する事である。

音楽科の学習指導要領(H20)には、『音楽を形づくっている要素や要素を通しての関連を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じ受すること、音楽に関する用語や記号などについて音楽活動を通して理解する事』を〔共通事項〕として示された。

この〔共通事項〕を音楽的根拠として、思考したり伝え合ったりする言語活動によって、思考力、判断力、表現力等の育成が図られる。つまり、〔共通事項〕とは、教師から与えられる表現の仕方のみでなく、生徒自身が自分の思いや意図を表現するため、どの要素をどのように働かせると目指す表現になるのかを試行錯誤しながら見出していく根拠とするものである。

(2) 思考、判断力、表現力を育む音楽科学習指導の評価とは

音楽表現の創意工夫を通して、表現の技能を高めたり、鑑賞の能力を高めるための知覚、感受力を育む手立てとその達成状況を見取る方法と基準である。

(3) 音楽科における表現領域と鑑賞領域の関連とは

音楽科指導において、「この教材曲をどう扱うか」が先行してしまい、音楽活動が目の前に展開されさらに意欲的な取り組み状況が展開されていけば、それであたかも音楽科の目標が実現されているかのような錯覚に陥っている授業例が多くみられる。

このような状況の中、表現と鑑賞を関連づけた題材構成の工夫することが、音楽科の学習の全ての支えとなる「音楽を形作っている要素を知覚し、音楽のよさや面白さ、美しさを感じ受する」感性を高めることに資すると考える。

4 研究の目標

表現領域・鑑賞領域において、音楽を知覚し、その良さや特質を感じ取り、思考力・判断力・表現力等をはぐくむ音楽指導とその達成を見取る適切な評価方法について究明する。

5 研究の仮説

表現領域において、音楽を形づくっているよう要素や要素同士の関連を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じさせるために適切な支援を行えば、生徒は主体的に思考・判断し、感じ取ったことやおもいを音楽的根拠に基づいて表現できるようになる。また、班や学級全体で交流することによって、自分の考え方をさらに進化させることができる。

6 研究計画(授業計画)

(1)題材名 箏に親しもう [A表現：器楽イ、A表現：創作ア、B鑑賞イ]

教材 箏曲「さくらさくら」(日本古謡)

箏曲「六段の調」(八橋検校作曲)

(2)題材の目標

- ①「さくらさくら」の曲想や箏の音色や奏法、平調子による旋律、構成に関心を持ち、箏の基礎的な奏法などを身につけて演奏する学習や、箏のための簡単な旋律をつくる学習に主体的に取り組む。
- ②箏の音色、平調子による旋律、構成を知覚し、それらの動きが生み出す特徴や雰囲気を感じながら、箏の特徴を感じ取って音楽表現を工夫し、どのように演奏するか、旋律をつくるかについて思いや意図をもつ。
- ③箏の特徴に関心を持ち音楽表現をするために必要な、基礎的な奏法などの技能を身につけて演奏したり、簡単な旋律をつくる。
- ④箏曲「六段の調」の音色、速度(間や序破急)を知覚し、それらが生み出す特質、雰囲気を感じ、鑑賞の能力を高める。

(3)題材の評価基準

音楽への 関心・意欲・態度	音楽表現の 創意工夫	音楽表現の技能	鑑賞の能力
①箏の特徴(楽器の構造や奏法、音色や響き、よさ)に関心を持ち、基礎的な奏法で演奏する学習に主体的に取り組もうとしている。[器楽]	①箏の音色、音のつながり方を知覚し、それらの動きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、箏の特徴をとらえ音楽表現を工夫し、どのように演奏するかについて思いや意図をもっている。[器楽]	①箏の特徴をとらえた音楽表現をするために必要な、基礎的な奏法、姿勢や身体への使い方などの技能を身に付けて演奏している。[器楽]	① 箏の音色、速度の変化(間や序破急)、平調子、奏法による音高や余韻の変化を知覚し、それらの動きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、音楽を形づくっている要素や構造と曲想とのかかわりを感じ取っている。[鑑賞]
②箏の音色、速度の変化(間や序破急)、平調子、奏法による音高や余韻の変化と曲想とのかかわりに関心を持ち、鑑賞する学習に主体的に取り組もうとしている。[鑑賞]	②リズム、音のつながり方、反復、変化、対照、などの構造を知覚し、それらの動きが生み出す特質や雰囲気をつくるかについて思いや意図をもっている。[創作]	②平調子の特徴を生かした音楽表現をするために必要な課題にそった音の組み合わせ方、記譜の仕方などの技能と身に付けて簡単な旋律をつくっている。[創作]	
③平調子の特徴に関心を持ち、音楽表現を工夫して簡単な旋律をつくる学習に主体的に取り組もうとしている。[創作]			

(4)題材の指導計画(総時間数6時間)

時	学習活動	指導上の支援・援助	評価基準				評価方法
			関	創工	技	鑑	
1	○楽器の特徴を知り、その楽器にふさわしい音色や基本的な奏法を用いて、箏曲「さくらさくら」の演奏する技能を身に付ける。	<ul style="list-style-type: none"> ・箏曲「六段の調」の一部を鑑賞し、箏の歴史、音色、奏法、調弦について資料や映像などを用いて理解させる。 ・箏の運び方、活動するときの注意事項に気を付けさせるとともにあいさつを大切に行わせる。 	①		①		質問紙法 ・ワーク 観察法 自己評価票
2	○平調子に調弦し、生田流の奏法を習得する。 <ul style="list-style-type: none"> ・右手の親指の奏法を習得する。 ・押し手（弱押し）を習得する。 ・旋律のまとまりを感じ取りながら、よく響く音で演奏する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・手前の糸の方が音が高くなるという感覚を身に付けさせる。 ・山田流との違いを比較させながら、座り方・奏法（爪の当て方・右手・左手の構え方）を習得させる。 ・「九八七」「八七六」など、隣り合った糸を低音方向に続けて引く場合は、爪をそのつど糸から離さずにそのまま次の糸を弾かせる。 ・右手の親指の鳴らし方を確認し、響く音を工夫させる。 ・音をよく聴いて、押す位置、強さ、タイミングに注意させる。 		①		観察法 聴取法 自己評価票	
3	○箏曲「六段の調」を鑑賞し、箏の音色、速度の変化（間や序破急）、平調子、奏法による音高や余韻の変化と曲想とのかかわりを捉え、伝え合う。	<ul style="list-style-type: none"> ・様々な奏法を演奏して、音色の特徴や変化を感じ取らせる。合わせ爪・スクイ爪・流し爪・ピッツィカート・トレモロ・余韻の変化（引き色・後押し） ・初段と三段を聴き、音色や奏法などについて気付いたことや感じたことを意見交流させる。 	②			①	観察法

		<ul style="list-style-type: none"> ・初段と三段を聴いて、奏法による音高や余韻の変化を聴き取らせる。 ・初段、三段五段を聴き比べ、気づいたことを学習プリントに記入して発表し合い、音色、速度、曲想が変化していることを確認させる。 ・六段を聴いて気付いたことを学習プリントに記入して発表し合い、最後に速度が穏やかになって終わることを確認させる。 ・「序破急」について、資料を用いて理解させる。 				<p>質問紙法</p> <p>・ワーク</p> <p>自己評価票</p>
4	○平調子の特徴、左手右手の奏法などを生かして創作をする。	<ul style="list-style-type: none"> ・どのようなイメージで曲を作るのかグループで話し合わせる。 ・参考の演奏 A（先輩の作曲した楽譜と演奏）を鑑賞したり、リズム符を参考にしながら個人で2小節の曲を箏を演奏しながら創作させる。 	③		②	<p>観察法</p> <p>学習プリント</p> <p>・楽譜の記譜</p> <p>自己評価票</p>
5	○グループで協力し、イメージにふさわしい箏の旋律を創作する。	・参考の演奏 B（先輩の作曲した楽譜と演奏）を鑑賞し、様々な奏法による旋律の変化・終止感・反復や変化などについて確認させる。		②	②	<p>観察法</p> <p>学習プリント</p> <p>自己評価票</p>
6	○創作した旋律の音楽的なよさを表現するためにどのように演奏すればいいかを考え工夫し、発表し合う。	・グループで、自分が工夫したいことを言葉や演奏で紹介し合い意見交換させる。		①	①	<p>学習プリント</p> <p>聴取法</p> <p>自己評価票</p>

7 指導の実際

(1)本時の主眼

箏の特徴を生かした簡単な旋律をグループで創作する。

(2)本時の指導観

前時までに、平調子の音階をいかして、一人ひとりがグループで決めた題名に合う2小節の旋律を創作している。また、箏曲「さくらさくら」の演奏の練習や様々な奏法の練習など箏の音色や奏法に親しんでいる。

本時では、個人が創作した旋律を用い、グループで8小節以上の曲を創作させる。参考演奏（本校上級生の演奏）をビデオで鑑賞させ、「曲づくりのポイント」①様々な奏法の記入の仕方 ②音のつながり方 ③最後の音（五か十）④構成（反復・変化・対照）⑤速度の変化を意識させることで、グループでまとめていく手立てとした。創作活動の場面では、楽譜の記入が苦手な生徒には、自由に演奏させたり、イメージを引き出しながら工夫できるように援助する。まとめの場面では、グループ毎に演奏させ、イメージや工夫したところを発表させ次時への活動へつなげる。

(3)準 備

教師 箏・爪曲作りのポイント（掲示物）・色々な奏法（掲示物）・
リズムパターン（掲示物）・学習プリント・グループの作品掲示物
参考演奏（ビデオカメラ・テレビ）
生徒 教科書・ファイル

(4)展 開

	学習活動	指導上の留意点	形態	評価
導 入 5 分	1. 前時までの学習内容を振り返る。 2. 本時のめあてを確認する。	○前時で個人で創作した2小節の旋律を演奏させ、お互いの旋律を確認させる。 ○グループで8小節の曲にまとめる活動について理解させる。	ペア 一斉	
	イメージにふさわしい箏の旋律をグループで協力し、創作しよう。			
展 開	3. 参考演奏を鑑賞し、曲の構成を工夫するイメージを持つ。	○参考演奏を鑑賞することで、「曲作りのポイント」を確認させる。 「曲づくりのポイント」 ①様々な奏法の記入の仕方 ②音のつながり方 ③最後の音（五か十） ④構成（反復・変化・対照） ⑤速度の変化	一斉	

35分	4. 個々の旋律を組み合わせ、グループで協力し、8小節以上の曲を創作する。	○3・4人のグループで協力しながら創作させる。 ○記譜に際しては、苦手意識を持つ生徒も多いことを考慮し、音符と糸の名称の記入を横書きの枠に記入させる。 ○様々な奏法を活用する場合は、記入の仕方を掲示し記入できるようにさせる。 ○机間指導をしながら、遅れているグループにはアドバイスをし、創作することに意欲を持たせる。	グループ	技②
終末10分	5. グループ毎の発表を行う。 6. 次時の予告を聞く。	○練習時間が十分でないグループは、代表の演奏、部分的に演奏をするなど、発表形態に配慮する。 ○次時は、創作した旋律にさらに表現の工夫を加え、発表し合うことを予告する。	一斉	創②

8 研究のまとめ

共通事項のうち音色・強弱・速度（間や序破急）・旋律（音階、音のつながり方）・構成を扱った。

「さくらさくら」（日本古謡）は、箏の手ほどきに使われていた曲で、1か所だけ左手の弱押しがあるが、右手の親指でほぼ演奏できるように編曲してあり、初心者でも弾きやすい。その分基本的な奏法を身につけさせ、日本的な音色や音階（平調子）について体験を通して感じ取らせ、箏固有の美しい音色を奏する方法を探り、その特徴や奏法に気を付けて表現させた。良い音色を奏するために必要な、正しい姿勢や奏法に意識を持たせるためにDVDを鑑賞させた。実際に自分自身で演奏する経験を踏まえて、箏曲「六段の調」（八橋検校作曲）の鑑賞につなげることで、箏の豊かな音色の響き、様々な奏法、日本の伝統文化の特徴である序破急などの間の取り方の美しさを感じ取らせた。そして、創作の活動では、表現や鑑賞の学習で感じ取ったことを生かし、実際に音を奏で、試行錯誤しながら音と音とのつながり方や終止感を考え、反復・変化の音楽を構成する原理を体験的に学ばせ創作することの楽しさや喜びを実感させた。

本題材において、思考力、判断力、表現力を育むために、次のような知覚、感受力を高める支援を行った。

(1) 要素を知覚するための支援

楽曲から音楽を形づくっている要素や要素同士の関連を分析的に知覚させるために、表現活動の箏曲「さくらさくら」の導入部分で、基本的な奏法や良い音色を奏するために必要な、正しい姿勢や奏法に意識を持たせるためにDVDを鑑賞させた。

日本的な音色や音階（平調子）について体験を通して感じ取らせ、箏固有の美しい音色を奏する方法を探り、その特徴や奏法に気を付けて表現させたい。

創作活動において、参考演奏（本校上級生の創作した曲を録画した DVD）をビデオで鑑賞させ、「曲づくりのポイント」①様々な奏法の記入の仕方 ②音のつながり方 ③最後の音（五か十）④構成（反復・変化・対照）⑤速度の変化を意識させることで、グループでまとめていく手立てとした。楽譜の記入が苦手な生徒には、自由に演奏させたり、イメージを聞きながら援助した。また、創作した音を楽譜にするときに、箏の楽譜には縦書きや横書きなど様々なものがあるが、歌唱表現活動でも活用できるように横書きにし、リズムと箏弦（一二・・・斗為巾）の名前や様々な奏法（合わせ爪・トレモロ・流し爪など）・リピート記号などを記入させるようにし、活用できるリズムパターンや様々な演奏法を掲示し活用できるように工夫した。

（2）感受した内容を言葉にし、思考を広げる支援

楽曲の特質や雰囲気を感じ取るために、活動全体の導入として、箏曲「六段の調」の一部を鑑賞し、箏の歴史、音色、奏法、調弦について資料や映像などを用いて理解させる場を設定した。生徒一人一人の気づきを把握するために学習プリントに記入し、交流した。箏曲「さくらさくら」の表現活動においては、ペアで活動させ奏法や音色に気を付けお互いに教え合いや気づきの交流をさせ、そのペアをもとに3～4人組で創作活動を行い、グループで決めたイメージ（日本の四季）をもとに個人で2小節の旋律を考え、グループで個の思いや意図をグループで交流しながら、8小節以上の曲を創作させる場を設定をした。また、交流活動においては、グループでの役割（進行やまとめ役のリーダー・記録係りなど）をもたせリーダーを中心に活動できるようにした。まとめの場面では、イメージや工夫したところを発表させながら発表し、作成した楽譜をその場でテレビ画面に映し出し、聞いた感想（よかったところなど）を交流したりする活動を設定し、言語活動を充実させることで生徒の表現力を高めるように工夫した。

9 成果と課題

〈 成 果 〉

音楽科は、限られた授業数の中で、表現、鑑賞、創作の分野をバランスよく指導しなければならない。

本年度は、昨年度の研究「鑑賞領域における言語活動の充実と感受能力を高める支援をとおして」の課題を受け、「創作活動を通して表現領域と鑑賞領域の関連を図る」研究を行った。

題材の指導に当たって、表現の技能を身につけた上で鑑賞を行ったことは、「箏」の豊かな音色の響き、様々な双方、日本の伝統文化の美しさへの興味関心を増した。創作活動では、表現や鑑賞で身につけたことを活かし、実際に音を奏で、試行錯誤しながら体験的に学ばせ創作することの楽しさや喜びを実感させることにつながった。また、グループでの創作活動時の箏の演奏、練習、交流は、音楽科の言語活動に有効であった。

「箏」の表現活動に鑑賞と創作領域を関連づけ、多角的に指導できたことは大変意義深いものであった。

〈 課 題 〉

音楽科教育指導は学校行事の絡みもあるため綿密に教育指導計画を立てると共に、学校教育全体の中での音楽科の重要な役割を十分に意識した支援を行っていくことが大きな課題である。

また、音楽科における言語活動は、音や音楽を知覚・感受しながら、歌ったり聞いたり音や音楽で確認（試す）しながら、「音」（「ことば+音」）でやりとりすることが重要である。

そのために、特に、「創作」や「伝統音楽」の扱いについて、少ない時間数の中でいかに充実した取り組みにしていくか、内容、時期など考える必要がある。

さらに、音楽科の共通事項の扱いについて、全領域の関連を再認識する研修が必要である。

題「紅葉」

二四 二四 三五 三五 四六 四六 五七 五七 〇
二四 二四 三五 三五 四六 四六 五七 五七 〇
七 六六 五五 四四 三三 二二 〇 〇 〇

参考演奏 A 楽譜

年で曲を創作しよう 2

グループで協力し、イメージにあわせた曲の楽譜を創作しよう。

1. 曲名 〇 〇 〇
2. 曲のイメージを言葉で表し、イメージから決めた曲調を創作しよう。
3. グループで創作した楽譜を完成させよう。
4. イメージと曲調を表現するために工夫したところは？

学習プリント

題「雪山」

二 二 二
二 二 二
二 二 二 二 二 二 二 二

参考演奏 B 楽譜

年で曲を創作しよう 2

グループで協力し、イメージにあわせた曲の楽譜を創作しよう。

1. 曲名 〇 〇 〇
2. 曲のイメージを言葉で表し、イメージから決めた曲調を創作しよう。
3. グループで創作した楽譜を完成させよう。
4. イメージと曲調を表現するために工夫したところは？

学習プリント

○参考文献

- ・文部科学省 「中学校学習指導要領解説 音楽編」 平成20年 教育芸術社
- ・文部科学省 「評価基準の作成，評価方法等の工夫改善のための参考資料【中学校音楽】」 平成23年教育出版